2007年度三重大学人文学部における

ＦＤ活動

報告書

2008年（平成20年）３月

三重大学人文学部

Ⅰ．2007年度ＦＤ活動の総括

人文学部のＦＤ活動は今年度で５年目の節目を迎えた。過去４年間の積み重ねのもとに、本年度のＦＤ委員会は概略以下のような活動をおこなった。

本年度ＦＤ活動の基本方針は、これまでのＦＤ活動を見直し、ＦＤ活動のスリム化をはかるというものであった。特に定例ＦＤ研修会に関しては、少なからぬ教員から開催回数の削減を求める声が寄せられていたので、今年度の開催回数は昨年度より１回少ない４回とした。しかも４回のうち１回は、従来定例ＦＤ研修会とは別建てで「夏季ＦＤ研修会」としておこなっていた外部講師による講演会を取り込んだので、実際上、定例ＦＤ研修会は昨年度より２回少ない３回のみとなった。

昨年度のＦＤ活動総括でも述べられているとおり、学部として組織的に実施されるＦＤ活動が今後とも「持続可能」なものとなるためには、教育・研究・学部運営活動をおこなう教員に与えられた「有限の時間と有限のリソース」の範囲内で、無理なくＦＤ活動が実施されなければならない。教員が、他の有用な活動の犠牲のうえに学部ＦＤ活動への参加を強制されているといった負担感をもつようであっては、ＦＤ活動を継続することはおぼつかないであろう。学部として組織的にＦＤ活動をおこなうことの重要性と必然性は言うまでもなく、またＦＤ活動の意義と有効性も学部構成員の間で一定程度共有されているとしても、教員に過剰な努力を強いてはなるまい。そもそもＦＤ委員会の企画した活動に参加することだけが､教員の教育活動の質を向上させる手だてではない｡学内にも学外にも、専門分野に応じて、あるいは専門分野を超えて、さまざまな情報と研修の機会が与えられており、関心に応じて利用できる状況にある。学部としておこなうＦＤ活動は、そうした個々人の努力を補完するかたちで、組織的な問題点を改善するための活動として、あるいは異なる専門分野での教育経験が蓄積されているという組織的特質を生かした活動などとして、無理のない範囲で継続的におこなう点に特性を求めることができるのではないだろうか。

さて、今年度の定例ＦＤ研修会の具体的な活動内容は、実施順にみれば、前年度の学生による授業評価アンケート結果を材料として各教員が授業改善に取り組むための意見交換（６月)、大学院教育に関する問題点の掘り起こし（７月)、「大学における不登校学生への対応」に関する講演会（９月）、年間ＦＤ活動の評価と反省およびＦＤ活動に関する教員アンケートの実施（12月）であった。詳細は定例ＦＤ研修会の項目およびＦＤ講演会の項目を参照いただきたいが、このうち７月定例ＦＤ研修会と９月定例ＦＤ研修会（外部講師招聘による講演会）について補足しておきたい。

７月定例ＦＤ研修会では大学院教育をテーマとして取り上げたが、その背景には大学設置審で大学院教育のＦＤ活動が必要とされたという事情がある。大学院教育に関しては、昨年度後期末に第１回目の大学院学生への授業評価アンケートを実施したが、教員間で検討するのは今回が初めてであったため、ＦＤ研修会では現時点における問題点の指摘とそれに基づく意見交換をおこなった。研修テー

マへの反響は大きく、ＦＤ研修会として高い評価を得る結果になった。さらに大学院教育の問題点の多くが、入試方法やカリキュラムなどＦＤ委員会の所掌範囲を超えるものであったため、ＦＤ研修会で出された意見を集約して、組織委員会に提出することになった。

９月定例ＦＤ研修会（外部講師招聘による講演会）では、三重大学学生総合支援センター学生なんでも相談室専任カウンセラー鈴木英一郎先生をお招きして、引きこもりなどの問題を抱える不登校学生への対応に関する講演をおこなった。このテーマは、三重大学学生総合支援センターが学生の修学支援・生活支援・心理相談などのために昨春発行した『学生対応ガイドブック』と連動させて選定したものである。講演では、不登校・引きこもりというテーマが多面的に取り上げられ、不登校学生に対する実践的な処方も提言されるなど、学生指導方法を改善するうえで非常に有益であった。質疑応答では幅広い観点から活発な意見交換がなされた。担任制の導入にみられるように、大学教員に中等・初等教育の教員のような役割が求められるようになってきている状況のなかで、時宜を得たテーマであり、参加者にも好評であった。

この講演会を定例ＦＤ研修会に組み込んだ理由であるが、もともと外部講師招聘による講演会には学部構成員にＦＤ活動の意義を理解させるという開催目的があったのだが、この目的はすでに達成されていると判断したからである。外部講師による講演を定例ＦＤ研修会に取り込むことによって、学部ＦＤ活動の現段階にふさわしい形態へと発展させ、講師やテーマ選定の自由度を増して、より有意義な内容の講演会を開催したいと考えた。

なお、11月に学部長主催によるアカデミックハラスメント講演会がおこなわれたが、上記したＦＤ活動スリム化の方針からはずれるなどの理由から、今年度はこの講演会をＦＤ活動とは位置づけなかった。何名かの教員からはハラスメントに関する研修会も内容次第では取り上げて、ＦＤ活動の幅を広げるべきという意見も寄せられている。来年度の検討課題としたい。

定例ＦＤ研修会以外の活動としては、学生・院生による授業評価アンケート、教員へのアンケートと授業参観をおこなった。学生・院生による授業評価アンケートは、全学一斉に実施されるマークシート式アンケートの一環として各学期末に実施した。教員へのアンケートは人文学部独自のアンケートであるが、質問項目は継続性を持たせるために、昨年度から変更しなかった。各アンケートの集計結果の詳細は、本報告書中の分析をごらんいただきたい。

授業参観については、今年度も昨年度同様の反省をしなければならない結果に終わった。今年度も教員相互の授業参観（公開）制度が、まったく利用されなかったのである。昨年度は、授業参観希望者を募り、参観の機会を設けるという制度であったが、今年度はそれを改めて、通常の授業科目のなかで公開してもよい授業を各教員に照会して、公開授業のメニューを作成した。その結果、８科目について公開の申し出があったが、参観希望者がなく、事実上授業参観（公開）は成立しなかった。今後の改善策を探るために、12月ＦＤ研修会において授業参観

制度のあり方を問うアンケートを実施した。詳細は授業参観についての項目を参照していただきたいが、実施すること自体を疑問視する声があった一方で、教員に授業公開を義務づける方がよいとの意見もみられた。

以上、反省すべき点も多いＦＤ活動であったが、今後とも組織としてのＦＤ活動を持続させるためには、無理のない範囲で、効率よく、時宜にかなったテーマを選定して企画することが必要であろう。

2008 年３月　人文学部ＦＤ委員長　大河内朋子